

# 中国におけるトキ保護の現状

上田恵介

中国からもらった日本のトキの子孫たちは、現在、佐渡島で順調に野生復帰を始めている。では中国のトキはどんな様子なのだろう。一昨年、機会があって、陝西省<sup>せんせい</sup>洋県<sup>やうけん</sup>から河南省<sup>ほんせい</sup>董寨<sup>とうさい</sup>まで、中国にある3つのトキ保護区の飼育施設をJICAの現地スタッフや地元の人たちの案内で回り、中国におけるトキ保護の様子をみて来たので紹介する。

佐渡のトキたちの野外への放鳥が始まって早や5年、野外へ放されたトキたちは順調に繁殖に成功し、ヒナも巣立ち始めている。ところでかれらは日本原産のトキではない。日本のトキは1981年に佐渡島に生息していた最後の野生のトキ5羽すべてが捕獲され、佐渡のトキ保護センターで人工飼育が試みられたが、繁殖に成功することなく、2003年に最後の1羽「キン」が死亡し、日本産トキは絶滅した。現在、佐渡島をはじめ各地の動物園で飼育され、人工繁殖が試みられているトキはすべて1998年に中国から譲り受けたオス「友友」<sup>ヨウヨウ</sup>とメス「洋洋」<sup>ヤンヤン</sup>のつがいから生まれた子孫である。ではかれらの故郷、中国のトキたちは、いまどうしているのだろう。

JICA（国際協力事業団）が中国でトキ保護事業への支援を行っている。飼育や放鳥等の技術はすでに確立されているので、トキを取り巻く社会的環境の整備が事業の目的である。トキ保護のパフレットを作ったり、地元の小学生たちに愛鳥教育を行なうといった側面支援のプロジェクトである。

一昨年、機会があって、陝西省<sup>せんせい</sup>洋県<sup>やうけん</sup>から河南省<sup>ほんせい</sup>董寨<sup>とうさい</sup>まで、中国にある3つのトキ保護区の飼育施設をJICAの現地スタッフや地元の人たちの案内で回り、中国におけるトキ保護の様子をみて来たので紹介してみたい。

洋県は陝西省の南、西安から車で3時間ほどのところにある人口8万の小さな地方都市である。周囲は小高い山に囲まれ、コムギやイネやトウモロコシを作っている典型的な中国の農村である。畑は山の上まで広がっている。



洋県の田んぼの真ん中の木にあるトキの巣。

トキは現在、飼育下のものも含めて中国全土で1800羽まで増えているという。これら中国のトキも、佐渡のトキも、すべて1981年に洋県で発見された7羽（2つがいとその子供たち）の子孫である（というのが中国側の公式見解であるが、それまで十分な調査がおこなわれたことがないので、もっと多数が奥地で生き残っていた可能性が指摘されている）。

洋県は低い山々に囲まれた盆地で、周囲の山には谷津田が続く、日本の里山と似た風景である。ただ斜面の傾斜が緩やかなため、谷津田がときには2kmも奥まで深く続き、周囲の山の斜面は雑木林に覆われ、いかにもトキの生息にとって好適な環境であった。そのひとつの村、麻底村では当時6巣が繁殖中で、斜面の松林に、夕方になるとトキが集まってねぐらをとっていた。もうひとつの周湾村では3つの巣があったが、1つはヒナが私たちの訪問前に繁殖に失敗し、2つが子育ての最中だった。1つの巣には3羽、もう1つには1羽のヒナがいた。巣は人家から100mも離れておらず、親鳥もすぐ下の水田で採餌していた。人をまったく恐れず、となりの田んぼで作業している農民と数mの距離でも平気で餌を取っているのは、かつて日本でも見られた光景であったろう。

トキはこうした山間部の谷津田のみではなく、洋県の郊外に広がる平野部でも普通に見ることが出来た、水田の真ん中に1本だけのこった大木の上にも巣があって、2羽のヒナが親から餌をもらっていた。さらに現地のスタッフからはトキが市内の人家の庭木にも営巣しているという話を聞いた。日本のトキを見ているとなにか神経質で臆病な鳥だと思っていたことが、とても意外であった。

寧西<sup>ねいせい</sup>にも飼育場がつくられ、洋県から移された16羽の



洋県のトキ保護センターの入口には「トキは国家第一級の保護鳥」と大きく書かれている。

トキが飼育されていた。ここでもすでに放鳥が行なわれ、周辺の谷に自然状態で30羽が生息しているという。洋県よりも標高が高い山に囲まれた谷間の村で、谷の傾斜が急なため、1つあたりの棚田の規模は小さく、幅が数mしかないような小さな棚田がきれいに続いている。しかしここでも農民の都市への流出が続き、上部の棚田は放棄されて、湿地化したり、下部の棚田は苗木用の畑にかわってしまっているところもあった。

洋県からトキが飛来することもあり、去年は2羽のメスが飛来し、それぞれつがって繁殖に成功したという。洋県とここは直線距離にして100kmくらいなので、日本でも佐渡のトキのメスが本土へ漂行したように、繁殖期にはメスはつがい相手を探して、これくらいの距離を普通に移動しているのだろう。

3番目の保護区は武漢にある董塞<sup>とうさい</sup>保護区で、ここでは去年、JICAの援助で馴化施設が完成し、放鳥が行われはじめている。ここには2007年に日本から里帰りしたトキ（日中間の協定で日本で生まれたトキの半数は中国に戻すことになっている）を中心に、17羽から始まったトキの飼育個体群がすでに88羽にまで増えていた。私が訪れたときには、まだ馴化用のケージがなかったので、狭い飼育ケージに10羽くらいずつが分散飼育されていた。成鳥のトキ以外にふ化したばかりのヒナが10羽ほど飼育されており、ヒナは順調に育っていた。さらにJICAが援助したトキ専用の孵卵器にも多くの卵があるということだった。

3つの飼育施設を見学させてもらい、現地の人たちの話も聞いたが、中国のトキは、たぶんもう心配ないだろう。洋県や寧西では、すでに十分な数の自然の繁殖集団が形成されている。董塞でも昨年、日本から返還されたトキを含む34羽が自然に放たれた。かれらは順調に数を増やし、陝西省や河南省の農村風景にとけ込んで行くだらう。それはおそらく日本のトキにも言えることである。佐渡島から新潟を中心にあと50年もすれば裏日本の平野部から山間部はトキの舞う風景にかわって行くだらう。

だが一つ心配がある。トキが生息する農村の現状はどうか。山間の谷津田は人が放棄すれば、あっというまに乾燥化し、ヤナギやハンノキなどの樹木が侵入して、トキの住めない環境にかわっていく。それは中国とて同じことである。近代化と経済成長が進む中国では、不便な田舎から都会への農民の移動が加速している。今回訪問した洋県でも、トキの巣のすぐ下の田んぼの持ち主は、「田んぼを作っても1年に4～5000元にしかならないが、西安に出て働けば月に3～4000元になる。もう来年は田んぼを作らずに町で働く」と言っていた。高齢化と人口減が続くのは日本の中山間地域とまったく同じ状況である。

トキを守ろうとする時、山間部の棚田や谷津田を残し、保全して行くには、そこでの人々の日常生活が、昔と同様に営まれていなければならないという問題に突き当たる。収量の少ない、労働のきつい谷津田をそのまま維持しなさいと、農民たちに簡単に言うわけにはいかない。農民たちが生き甲斐と喜びを持って農業に打ち込むことができ、か



河南省董塞のトキ飼育施設。このときはまだ順化ケージは出来ていなかった。



河南省寧西の棚田。ちょうど田植えが終わったばかりだった。

つ一定の収入が保証できるような施策を取らない限り、いくらトキの放鳥数が増加しても、生息適地はどんどん減って行く。

それは日本でもおなじことである。中山間地域は若者たちの流出と高齢化で、どんどん離村が続き、廃村になる集落も加速的に増えている。かつて薪炭林として、頻繁に人の手が入っていた里山は、いまは利用する人もなく、放置されたままになっている。日本の山と里の美しかった風景がどんどん消えている。そう遠くない将来、私たちが気づいたときには、懐かしい山里の風景は消え、里山という言葉もなくなってしまっているのではないだろうか。大規模化を指向し、農業と化学肥料をつぎ込むだけの農業に未来があるとは思えない。トキが遊ぶ美しい野山を保全していくためには、農業と自然の調和を主軸に据えた抜本的な農業政策の転換が必要とされているのではないだろうか。

上田恵介（うへだ・けいすけ）立教大学理学部生命理学科教授。ESD研究所所員。1950年、大阪府枚方市に生まれる。主な研究テーマは鳥の行動生態学、進化生物学。理学博士。主著に『花・鳥・虫のしがらみ進化論―「共進化」を考える』『擬態―だましあいの進化論』1～2、『種子散布―助け合いの進化論』1～2（築地書館）、編著に『行動生物学辞典』（東京化学同人）、監修に『鳥（小学館図鑑NEO）』（小学館）、『世界の美しい鳥』（パイインターナショナル）など多数。